

行政視察報告書

委員会名（会派名）	総務文教常任委員会	報告者	齋藤和也、近藤隆行、 田中淑子
視察日程	令和7年10月1日～10月3日		
調査事項 及び 視察地	① 新分水良寛史料館の基本構想策定に向けた公共施設の現状について （静岡県掛川市：掛川市立中央図書館、大日本報徳社、掛川ステンドグラス美術館、二の丸美術館） ② 部活動の地域展開について（静岡県掛川市） ③ 防災対策について（静岡県三島市）		
参加議員（委員）	岡山秀義、近藤隆行、渡邊広宣、宮路敏裕、藤井秀人、田中淑子、齋藤和也		
【調査目的・内容】 新分水良寛史料館の基本構想策定に向けた公共施設の現状について			
【所感】 ① 掛川市立中央図書館 掛川市立中央図書館では、単なる図書館機能にとどまらず、地域の歴史や文化を「利用者にかかれた形」で発信する姿勢が随所に表れていたことが印象的であった。特に以下の点は、新分水良寛史料館の設計において参考になると感じた。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 自然素材と光を活かした空間 館内は木材を多用し、自然光を取り入れた明るい設計で、来館者が落ち着きと温かみを感じられる空間づくりは、史料館でも活かすべき要素である。良寛と思想や書がもつ「静けさ」「柔らかみ」を、建築デザインの質感や採光計画に反映させることができる。 2. 多世代にかかれた利用空間 図書館には社会人専用席、子ども用コーナー、畳スペースなど世代や目的に応じた空間が配置されていた。史料館においても、学術研究者向けの閲覧室と、子どもが触れて学べる体験型展示スペースを併設することで幅広い世代の来館を促すことが可能である。 ① 3. 地域文化資源との調和 図書館が掛川城や大日本報徳社などと文化ゾーンを形成しているように、分水においても周辺の寺院や歴史的資源と連携し、史料館単体ではなく「まち全体で良寛を感じられる文化回廊」を形成することが望ましい。史料館を起点とした地域散策ルートへの設計は観光振興にも資する。 4. 交流と学びの拠点化 掛川市中央図書館がイベントや講座を積極的に展開していた点も注目に値する。良寛史料館も、展示のみに留まらず、書道体験、読書会、研究会などを通じた「市民と研究者の交流の場」として機能させるべきである。これにより、史料館が地域に根差し、継続的な来館動機を生む拠点となる。 まとめ 掛川市中央図書館は、建築設計と運営方針が一体となり、「文化と人をつなぐ場」を実現していた。新分水良寛史料館においても、単なる史料保存の場ではなく、「光と木の温もりを感じられる空間設計」「世代を超えて集える学びの仕組み」「地域資源との連携による文化回廊」「交流と体験を通じた継続的利用」といった要素を意識的に取り入れることで、地域にかかれた持続的な施設づくりが可能になると考える。			
② 大日本報徳社 大日本報徳社は、二宮尊徳の報徳思想を全国に広める中核拠点として設立され、今日まで市民教育			

や地域経済の基盤形成に貢献してきた歴史を有している。その活動や建築群を視察し、以下の点が新分水良寛史料館の構想において大いに参考になると感じた。

1. 歴史的価値と建築意匠の一体化

大講堂をはじめとする歴史的建造物群は、近代和風木造建築として全国的に高い評価を受け、文化財として保存されている。その姿勢から学ぶべきは、単に資料を展示する施設に留まらず、建物自体が歴史的価値を語る存在であることである。新分水良寛史料館においても、良寛が生きた時代性や思想を体感できる空間設計を取り入れることで、「史料を見る場」から「歴史を感じる場」へと発展させることが可能である。

2. 思想と地域社会の接点づくり

報徳思想は「至誠・勤労・分度・推譲」の四原則に基づき、道德と経済の両立を掲げている。その思想が農協や信用金庫の形成にまで影響を与えた点は注目に値する。良寛史料館においても、良寛の思想を現代の地域づくりや教育にどう生かすかを提示する展示やプログラムを設けることで、市民にとっての“学びの実践拠点”となりうると考える。

3. 市民参加による継続的な学び

大日本報徳社が明治期から毎月欠かさず「常会（学習会）」を開催し、市民が思想を学び続けてきた事実は、施設の持続的な活力を生み出している要因である。良寛史料館においても、講座・座談会・書道体験・市民研究発表会といった継続的な市民参加型の活動を設計段階から組み込むことが、単発的な展示以上の価値を創出することにつながる。

4. まちなか文化ゾーンとの調和

大日本報徳社は掛川城公園に隣接し、図書館や歴史資源とともに文化的景観を形成している。史料館単体ではなく、地域全体で文化を体験できる一体性を醸成している点も参考になる。分水地区でも寺院や地域資源と連携し、「良寛の思想と歩くまち」といった回遊性を持たせることは、観光や交流人口拡大にもつながると考える。

まとめ

大日本報徳社は、「思想の継承」と「建築文化の保存」を両輪としながら、地域社会に学びと実践の場を提供し続けている。新分水良寛史料館の構想においても、

- ・ 建築そのものに歴史的意味を込めること
- ・ 思想を現代社会につなげる仕掛けを持つこと
- ・ 市民が継続的に関われる仕組みを設計すること
- ・ まちなか全体と調和した文化回廊を意識すること

これらを設計段階から意識的に取り入れることが、史料館の持続的価値と魅力を高めると考える。

③ 掛川ステンドグラス美術館

掛川ステンドグラス美術館は、日本初の公立ステンドグラス専門美術館として、19世紀イギリスやフランスの教会・邸宅に設置されていた本格的なアンティーク作品を間近で鑑賞できる施設である。光を受けて刻々と表情を変える作品群は、来館者に強い印象を与えると同時に、「光そのものが展示の一部」であることを実感させる。視察を通じて、以下の点が新分水良寛史料館の設計に参考になると感じた。

1. 「光」を生かした展示演出

ステンドグラスは光の変化により姿を変え、訪れる時間帯や天候によって異なる美しさを楽しむことができる。これは展示空間に「動き」と「発見」をもたらす要素である。

良寛史料館においても、自然光や照明を工夫して、書や遺品に柔らかな陰影を与えることで、静謐さと精神性を感じられる展示演出を可能にできると考える。

2. 作品との距離感の工夫

掛川ステンドグラス美術館では、通常は高所に設置される教会窓を「目の高さ」で鑑賞できる設計となっており、作品の細部や技法を身近に感じられる。良寛史料館でも、展示品を「遠くから眺める」形式に留めず、来館者が細部に触れるような展示構成や体験型解説を組み込むことで、

より深い理解や共感を引き出せるだろうと考える。

3. 寄贈文化と市民参画

本美術館は、掛川市在住の開業医・鈴木政昭氏が貴重なコレクションを建物とともに寄贈したことから誕生した。個人の想いが公共空間に昇華し、市民に開かれる形となった事例は、史料館構想においても参考になる。良寛史料館においても、市民や有志団体による寄贈・協力を得る仕組みを整えることで、地域住民の誇りや関与意識を高めることができる。

4. 芸術・文化体験の多様性

掛川ステンドグラス美術館では、展示に加えて体験講座やコンサートなども開催し、来館者に多様な文化体験を提供している。良寛史料館でも、展示だけでなく、書道体験や瞑想ワークショップ、良寛に関する講演会・朗読会などを組み合わせることで、訪れる人々が「体験を通じて学ぶ」空間に発展させられる。

まとめ

掛川ステンドグラス美術館は、光と芸術を融合させた幻想的な空間であり、単なる美術鑑賞の場を超えて市民や観光客の心に深く残る仕掛けを持っていた。新分水良寛史料館においても、

- ・光や空間を生かした展示設計
- ・作品と来館者との距離を縮める仕組み
- ・寄贈文化や市民参画の仕組み
- ・展示にとどまらない多様な体験提供

を設計段階から意識することが、良寛の思想を現代に伝え、地域に根ざした文化拠点を築く上で大きな鍵になると考える。

④ 二の丸美術館

掛川市二の丸美術館は、掛川城公園内に位置し、煙草道具・印籠・刀装具を中心とした「木下コレクション」や、横山大観・川合玉堂ら巨匠の作品を含む「鈴木コレクション」を所蔵する地域文化拠点である。繊細な工芸と近代日本画という二つの特色を兼ね備え、企画展や特別展を通じて市民や観光客に文化芸術を発信している。視察を通じて、新分水良寛史料館の構想に参考となる点は以下のとおりである。

1. 多様なコレクションの組み合わせ

木下コレクションの工芸品と鈴木コレクションの近代絵画を組み合わせることで、展示の幅を広げている点は示唆に富む。良寛史料館においても、良寛自身の書や遺品だけでなく、同時代の文化資料や地域に関連する工芸・美術品を組み合わせることで、歴史的な文脈の中に良寛を位置づける展示が可能になる。

2. 地域と巨匠をつなぐ展示構成

二の丸美術館は、巨匠作品を展示する一方で、地元出身作家や掛川の風景をテーマにした展覧会も開催している。この「全国的価値と地域的価値を同時に示す展示」は、地域文化を高める工夫である。良寛史料館でも、良寛という全国的に知られる人物と、地域文化や市民活動を結びつける展示・企画を行うことで、地域の誇りを高める役割を担える。

3. 文化ゾーンの中での役割

二の丸美術館は、掛川城やステンドグラス美術館、報徳社などとともに「文化ゾーン」を形成している。個別施設の魅力を高めつつ、エリア全体で文化回遊を生み出している。分水地区においても、良寛史料館単体ではなく、寺院や地域拠点と連携して「良寛文化回廊」を形成することで、回遊性のある文化観光を育てることができる。

4. 教育・普及活動の重視

二の丸美術館が企画展や教育普及活動を継続的に行っていることは、文化施設としての息の長い運営につながっている。良寛史料館でも、展示更新やテーマ展、子ども向けワークショップなどを企画することで、「一度行って終わり」ではなく、繰り返し訪れる動機づけを仕組みとして設計する必要がある。

まとめ

二の丸美術館は、工芸と絵画を組み合わせた多彩な展示により、地域文化と全国的芸術を結びつけ、文化ゾーン全体の魅力を高めていた。新分水良寛史料館においても、

- ・史料+関連文化資源を組み合わせた展示
- ・全国的価値と地域文化を両立させる企画
- ・周辺施設との連携による文化回廊形成
- ・教育・普及活動の継続性

を意識して取り入れることで、地域に根差しながら全国から人を呼び込む力を持つ施設へと発展できると考える。

【調査目的・内容】

部活動の地域展開について

【所感】

燕市に先んじて部活動の地域展開を開始し、来年度には完全移行する予定である。

「学校教育の一環」から「生涯学習の一環」へを掲げ、単に部活動の地域移行だけでなく、地域全体のウェルビーイングのために展開している。

- ② 指導者バンクや、地域クラブサポートセンターを創設し、地域クラブの公認などを推進していることも、様々な受け皿を作るために必要な政策であると考ええる。また、アンケートでニーズや、傾向性を把握したり、いろんな場面で会議体を作り、丁寧に合意形成をしながら地域展開を進めている印象である。部活動の地域展開では課題が多い吹奏楽部も、様々な協議を行い、実働しているのも学ぶところが多い。

「持続性」、「多様性」、「公平性・包摂性」を重視し、単に学校教育だけにとどまらず、地域全体を巻き込み、活性化させていくという地域展開は学ぶところが多い。これが上手く軌道に乗ると、地域全体での人材の交流と循環が生まれる。燕市でもこのような捉え方で部活動の地域展開を考えるべきである。

【調査目的・内容】

三島市は人口約104,000人、外国人は約1,600人(1.58%)、世帯数は約49,900世帯で高齢化率は30.6%である。そのような中、南海トラフ地震に備えて様々な防災対策を想定し実行している。

防災情報提供手段として、防災行政無線、防災ラジオ、市民メール、LINEがある。そして、全自治会の自主防災組織が充実し、市と市民とのコミュニケーションで、危機管理体制を強化している。

【所感】

- ③ 南海トラフ地震への危機感がとても強く、市民一人一人が日ごろから意識して備えている。様々な訓練を定期的実施し、市からすぐ自治会長へ電話し避難行動の方法確認など自治会長の役割も大きいのが、積極的に皆さんが受けていただけると聞いて感心した。何かあった時は、やはり自治会の方々と協力し合い助け合うことが一番必要ではないかと感じた。

【視察の様子】

① 掛川市立中央図書館



② 大日本報徳社

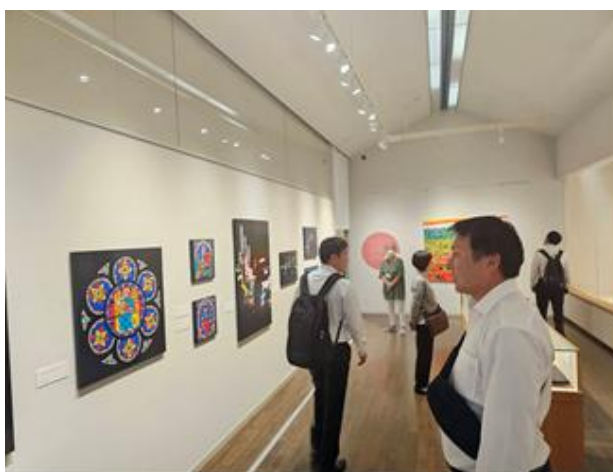


③ 掛川ステンドグラス美術館



【視察の様子】

④ 掛川市二の丸美術館



⑤ 静岡県掛川市



⑥ 静岡県三島市

